

イベント報告

ヒストリー・レッスンズ： 日本におけるフェミニスト／ クィア映画キュレーションの現在

企画・共催：

シュテファン・ヴェーラー (CGS 研究員)・subversive records

報告者：

浜崎史菜 (subversive records)

2022年3月6日に開催された本イベントは、フェミニスト／クィア映画論とフェミニスト／クィア映画キュレーションを現在日本で実践している専門家をお招きし、「ジェンダー」と「セクシュアリティ」の問題が「映画」とその「キュレーション」においてどのように交差してきたかについて考え、日本におけるフェミニスト／クィア映画キュレーションの“今”に光を当てた。すべてオンライン (Zoom ウェビナー) で実施された本イベントの参加者は191名であった。

フェミニスト／クィア映画キュレーションとはどのように政治的な実践なのか。映画キュレーションにおいてフェミニズムとクィアな問題意識はどう交差してきたのか。この交差について考察を深めるため、歴史から他者化されてきたレズビアン女性の姿をアーカイブ資料の中に探し出し、「歴史」の再考を迫るバーバラ・ハマーの映像作品『ヒストリー・レッスンズ』(2000年)を西山敦子氏の日本語字幕付きで国内初配信し、それを通して、フェミニスト／クィア映画キュレーションの限界と可能性について検討した。

共催・企画したシュテファン・ヴェーラー氏のイントロダクションでは、シュラミス・ファイアストーン引用と共に、フェミニストの芸術的表現が「正史」に刻まれてこなかったことが喚起された。またフェミニストの芸術的表現やその歴史さえも必ずしも包括的ではなく、周縁としての他者をつくりだしてきたことにも注意を促された。さらに、フェミニスト映画運動が起こった1970年代と比較し、今日はフェミニスト・クィア映画ならびにフェスティバル等上映の機会が

増えたように見受けられるが、それは真に多様性を反映するものなのか、資本主義・商業主義と手を組んだ表層的なものとなっていないかと批判的議論の必要性が投げかけられた。それらの問題意識を共有した上で、本イベントの目的であるフェミニスト／クィア映画キュレーションの「現在」を多角的に検証することが喚起された。

続いて、subversive recordsの浜崎史菜は、「表象のアクティヴィズム：フェミニスト／クィア映画運動の概歴」というタイトルで発表を行なった。イベントのタイトルとなっている「ヒストリー・レッスンズ」に立ち返り、いかに「歴史」が「表象」と強く結びつき、それによって「表象」が「生存」に繋がる問題であるかが指摘された。「歴史」が取りこぼしてきた「表象されなかった存在」に注意を向ける重要性を説きながら、1960年代後半から1970年代に起きたフェミニスト映画運動におけるフェミニスト映像作品やそれらにおけるクィア性は、これまでドミナントな言説の中で他者とされてきた、眼差される対象としての女性やクィアな存在が表象、つまり、主体の位置を獲得することと同義であったと説かれた。それは対抗言説／表象を作り出す政治的活動であり、男性中心主義的な視覚の政治を挫くものであったのだ。しかし、それと同時に、抵抗のためにカメラが使用される時でさえ、どのような存在が包摂され、どのような存在が排除されているかについて常に注意を向ける必要があると喚起された。

次に現代日本でフェミニスト／クィア映画キュレーションはどのように実践されているのか、subversive recordsメンバーであり映画担当学芸員の中西香南子氏が「上映の場から考えるフェミニスト／クィア映画キュレーションの実践と課題」と題して発表を行なった。日本におけるフェミニスト／クィア映画キュレーション史を検証するにあたり、予算がついた上映会についてはプログラムやチラシが残っており、アーカイブを見ることができるが、そうでないものに関しては存在すらも分からないという「歴史」の“脆さ”や“不完全さ”が指摘された。例として1977年に行われた出光真子や道下匡子らフェミニスト・ビデオ作家らの作品が上映された「女性映画作家フェスティバル」があることが挙げられた。中西氏が映画キュレーションをはじめた2010年代は、ミニシアターの数の減少と重なった時期であり、それがフェミニスト・クィア映画上映の機会の減少と関わりがあるのではないかと指摘された。中西氏自身がキュレーションを務め、

『ボーン・イン・フレームズ』（1983年）を日本初上映した「Kawasaki Feminist Film Month 3月女性史月間特集」（2019年）での実践から、いかに予算と集客を集め、次の企画に繋ぐことができるかといったキュレーション実践者ならではの現実的な側面が報告された。フェミニスト映画とクィア映画の接続の可能性を探ったsubversive recordsによる「フェミニスト・クィア映画月間：バーバラ・ハマー」（2021年）では、インディペンデントに実行されたが、国家や体制に包摂されることに抵抗しながら、いかに資金をインディペンデントな活動体として獲得していくのかというクリティカルな指摘がなされた。最後に、70年代のフェミニスト映画運動のように、上映だけでなく、観客との対話とアーカイブとしての映画を通したゆるやかなネットワークの形成の重要性が説かれた。また、ある特定の作品を「選ぶ」というキュレーションの作業は、他の作品を「選ばない」ことをも意味しており、そのようなキュレーションのある種暴力的な側面について自覚的でありたいという中西氏の意志が語られた。

続いてnormal screenの秋田祥氏が「半地下のパラダイス—存在を確認する光の集いを緩やかに組み立てる」と題して発表を行なった。2015年からはじまったnormal screenは、地域や場所を越えたクィアな連帯の可能性を持つ映像作品をセレクトし、LGBTの人が安心して共に鑑賞できる場を目指して2015年からはじまった。映像作品を介したエイズ・アクティヴィズムを行う非営利団体Visual AIDSの映像上映を振り返りながら、「沈黙は死」という言葉が、「黙っては見殺しにされてしまう」という意味だけではなく、「沈黙を強いられた、語られなかった存在や経験は無かったことにされてしまう（アーカイブとして残らない）」ことも含意していることを重要な点として提起し、その「沈黙」に目を向けることの重要性が説かれた。さらに、アーカイブに関連して、normal screenの上映活動を振り返りながら、上映イベントと作品の記録をウェブ上で明示することの意義が語られた。今後の課題としては情報保障のさらなる充実を図ることや日本における検閲について考える機会を設けることが挙げられた。最後に、トークタイトルの「存在を確認する光の集い」とは、過去に制作された映画の光を劇場で反射しながら、クィアな存在が現在をいかに生きるかを思索する場をつくる意が込められていることが語られた。

バーバラ・ハマーの『ヒストリー・レッスンズ』配信前に、subversive records

の井上絵美子氏により「バーバラ・ハマー as ボルノ・ドクター」と題し、『ヒストリー・レッスンズ』の紹介がなされた。ハマーがいかに歴史における不／可視化の問題、特に、レズビアンが歴史の中で抹消されてきたかに関心を持っていたかが語られ、ヒストリー三部作と呼ばれる『ナイトレイト・キス』(1992)や『テンダー・フィクションズ』(1995)、そして『ヒストリー・レッスンズ』(2000)において不可視化された存在を可視化し、歴史の「証言」とされるアーカイブを戦略的に批判したことが指摘された。1969年のストーンウォール以前のレズビアン表象を祖上に載せた『ヒストリー・レッスンズ』は、広告や宣伝映画等様々なアーカイブを用い、それらのクイアな読みの可能性を展開させるものであった。『ヒストリー・レッスンズ』はボルノグラフィや雑誌等を含む視覚的資料のみならず、聴覚資料も効果的に用いられ、バイセクシュアルであったブルース・シンガーのベッシー・スミス、レズビアン雑誌を編集していたリサ・ベン、そしてパンクシーンで活躍していたレズビアンズのグレッチェン・フィリップスらの曲が使用されていることが説明された。井上氏のトークタイトルにある「ボルノ・ドクター」という語は、ヘテロセクシャル男性の欲望の表出としてレズビアン表象の多くが偏ったものとなっていることに対し、それを揶揄する形で、権力者や政権を意図的に操るために、歪曲した報道を繰り返すことを指す「スピン・ドクター」という言葉に掛けてハマーによって『ヒストリー・レッスンズ』のオリジナルタイトルとして用いられた。しかし、「ボルノ」という語が助成金先より検閲対象となり、『ヒストリー・レッスンズ』というタイトルに変更されたという。

また、映画配信に先立ち、日本語字幕翻訳を担当された西山敦子氏が作成された作品と字幕に関する豊富な補足資料が配布され、『ヒストリー・レッスンズ』は配信された。

映画配信後は、同志社大学の菅野優香氏が「レズビアン・スクリーン：バーバラ・ハマーによる実験映画史」と題した発表を行なった。菅野氏はハマーがレズビアン歴史の複数性を作品で表すとともに、男性中心主義的な実験映画の歴史やエッセンシャル・シネマの枠組みに批判的に介入しているのではないかと指摘した。そして、レズビアン表象が欠如した「空白のスクリーン」にレズビアン身体と歴史を映し出すことをハマーは作家人生を通じて取り組んだのではないかと

と提示した。エッセンシャル・シネマの「歴史」から排除されていたハマーの作品は、作品上映のオルタナティブな場として、フェミニスト・ブックストアやウィメンズ・コーヒーハウス、女性学の授業の場等で上映された。「不可視の歴史三部作」に関しても説明がなされた。不可視化されてきたレズビアン、ゲイの歴史をテーマとした『ナイトレイト・キス』（1992）はコラージュやモンタージュを用い、窺視的なまなざしを避けるように断片的に歴史を描き出し、自伝的な『テンダー・フィクションズ』（1995）では、眼差される対象としてではなく、イメージの作り手（主体）としてのハマーの姿が前景化される。また本イベントで配信された『ヒストリー・レッスンズ』（2000）ではレズビアンに関するネガティブな表象をあえて反復的に用い再領有することで、クィアな批評性が浮かび上がる。また、ハマーが大きな影響を受けたマヤ・デレン、そしてハマーと交友のあったジェーン・ウォデニング（ブラッケージ）について語られた。デレンについては、作品における肉体性の重要性、デレンの作った概念である創造的地理（creative geography）、そして作家自らが作品に出るパフォーマーとしての側面を受け継いだのではないかと指摘された。ジェーン・ウォデニングに関し、ハマーは、*Jane Brakhage*（1974）において、スタン・ブラッケージとは異なる視点から彼女を撮ったと言えるという。最後に、菅野氏は、ハマーの描こうとした歴史とは、形式主義に抗った実験映画のカウンター・ヒストリーであり、またその歴史は集合的に書くレズビアン／フェミニスト・ヒストリーであったのではないかと提起した。

質疑応答では、フェミニスト映画運動の射程を北米・イギリス等英語圏に限定せず、様々な地域のフェミニスト・クィア映画を調べ、上映していくことの重要性が再確認された。また、ビデオ作品に関しては、メディアムの老朽化から作品へのアクセスが難しくなることから早急なデジタル化が求められていることが話題に上った。さらに、上映会における情報保障の重要性や上映会を続けるにあたっての現実的な資金の工面の必要性について共有された。

今日日本においてフェミニスト／クィア映画キュレーションを実践する上で直面する困難が提起されながら、まさにフェミニスト／クィア映画キュレーションの「現在」に迫るイベントとなった。「ヒストリー・レッスンズ」というタイトルのように、決して「中立」ではない「歴史」やアーカイブから何を読み取り、

いかにクィアやフェミニストのアクティヴィスト的实践に繋げていくのか、それぞれの登壇者の発表及びハマーの作品からヒントを得られたように思う。

Event Report

History Lessons **—The Present of Feminist/ Queer Film Curation in Japan**

Co-organisers:

Stefan WÜRRER (CGS Researcher) • **subversive records**

Reporter:

Fumina HAMASAKI (subversive records)

For this event (held on the 6th of March 2022), we invited experts and practitioners of feminist/queer film theory and curation in Japan to discuss how issues of gender and sexuality intersect within the realm of film and its curation, and to shed light on the present of feminist/queer film curation in Japan. This event was conducted online (Zoom webinar) and there were 191 participants.

In what ways is feminist/queer film curation a political practice? How have feminist and queer issues intersected in film curation? One way we approached these issues was through Barbara Hammer's *History Lessons* (2000). Searching for images of lesbian women — one of History's Others — in archival footages and documents, Hammer's *History Lessons* was streamed for the first time in Japan with Japanese subtitles by Atsuko Nishiyama. This film offered us an opportunity to discuss the limits and possibilities of feminist and queer film curation.

The event started with the introduction by Stefan Würrer, who co-organised the event. Citing the words by Shulamith Firestone, Würrer suggested that feminist art practices are often excluded from "history". It was also pointed out that feminist art expression and its history are not necessarily always inclusive and produce the excluded "others". Compared to the 1970s

when the feminist film movement emerged, it seems that there is an increase in opportunities of feminist/queer film festivals and screenings. However, Würrer questioned if that truly reflects diversity, and whether it is superficial phenomenon connected with capitalism and commercialism. By sharing these concerns, Würrer evoked the speakers and audience to consider the “present” of feminist/queer curation from different perspectives.

Fumina Hamasaki (a member of subversive records) gave a presentation titled “Activism for/against Representations: A Brief History of the Feminist/Queer Film Movements”. Hamasaki pointed out how “history” is connected with “representation”, and how “representation” plays a significant role for “survival”. Invoking the importance of paying attention to what was not represented and excluded from the “history”, Hamasaki argued that the feminist films and queerness emerged from the feminist film movement in the late 1960s and 1970s aimed for women and queers as the “others” and the “objects” to be looked at in the dominant discourse to acquire their own representations and subjectivities. It is a political act to create counter-discourses/representations and defy the politics of phallogocentrism. At the same time, however, Hamasaki noted that even when the camera is used for feminist and queer resistance, it is important to always consider who is included and excluded from the practice.

Regarding how feminist/queer curation is practiced in Japan today, Kanako Nakanishi (film programmer and a member of subversive records) gave a presentation titled “Practice and Challenge of Feminist/Queer Film Curation in Japan”. Nakanishi pointed out precarity and imperfection of archival “history” because when it comes to researching the history of feminist/queer film curation, whereas film screening events with budgets are likely to be archived with programs and flyers, for those without budget, we would never know if they even took place or existed. As an example of feminist film curation, Nakanishi introduced “Women Filmmakers Festival”, which screened the works of artists such as Mako Idemitsu and Kyoko Michishita. Nakanishi

started film curation in the 2010s and it is when there was a decrease in the number of “mini theatres” in Japan. Nakanishi pointed out this may be related to the decrease in the number of screening feminist/queer films. Nakanishi presented a practical report such as the ways to gain budgets and audience, and how to lead to a next screening project, based on her film curatorial practice: “Kawasaki Feminist Film Month” (2019) which screened *Born in Flames* (1983) with Japanese subtitles for the first time in Japan. Referring to subversive records’ “Feminist/Queer Film Month: Barbara Hammer” (2021), Nakanishi made a critical point that how we could possibly gain budget as an independent collective while resisting to be politically subsumed by the country and establishment. In the end, Nakanishi argued for the significance of creating a network through not only film screening but also interaction with the audience like the feminist film movement in the 1970s did. Nakanishi also suggested that curation—an act of “choosing” a specific work—is also an act of “not choosing” other works, and that she would like to be aware of such violent aspect of curatorial practice.

Akita Sho (normal screen) gave a presentation titled “A Paradise in the Semi-Underground: Loosely Assembling Existence-Affirming Bundles of Light”. Normal screen started in 2015 and selects films which have potential for queer solidarity beyond areas and space, aiming to create a space where LGBT people watch films safely. Referring to a non-profit organisation Visual AIDS, which engages in activism through film screenings, Akita pointed out that “Silence = Death” means not only that “if you remain silent, you would be left to die,” but also “those who are forced to be silenced would be erased (from archive/history)”. Thus, Akita argues for the significance of paying attention to the “silence”. In relation to archive, Akita, looking back to the film screening events of normal screen, emphasised the importance of listing up the records of the events and films on the website of normal screen. As future tasks, Akita mentioned the necessity to enhance information accessibility, and also create an opportunity to consider censorship in Japan. At the end of the

presentation, it was told that the “Assembling Existence-Affirming Bundles of Light” in the title implies how queer existences create a space to live and speculate by reflecting the light of a film in theatre.

Before online streaming of Barbara Hammer’s *History Lessons*, Emiko Inoue (a member of subversive records) gave a presentation titled “Barbara Hammer as Porn Doctor: An Introduction to *History Lessons*”, introducing Hammer’s *History Lessons*. Inoue explained how Hammer was interested in in/visibility — especially erasure of lesbians — in history, and pointed out that Hammer’s History Trilogy such as *Nitrate Kisses* (1992), *Tender Fictions* (1995) and *History Lessons* (2000) makes the invisible visible and strategically criticizes archive as “testimony” of history. *History Lessons* focuses on the representations of lesbians before the Stonewall Riots in 1969 and by using various archives such as advertisements and propaganda films, it seeks to open up the queer reading of them. *History Lessons* deploys not only the visual resources such as pornographies and magazines but also the audio resources such as the songs by Bessie Smith (who was a bisexual and blues singer), Lisa Ben (an editor of lesbian magazine), and Gretchen Phillips (a lesbian and punk musician). Inoue explained that “Porn Doctor” in the title of the presentation was an original title of *History Lessons*, which Hammer took an idea from “spin doctor” (meaning an act of broadcasting distorted reports in order to manipulate a person in power or government) so as to criticize the fact that many lesbian representations are created out of desire of heterosexual men. However, the word “porn” was censored by its funding body.

Prior to the film streaming of *History Lessons* (2000), documents of rich supplementary information regarding the film and subtitles made by Atsuko Nishiyama were circulated.

After the film streaming, Professor Kanno Yuka (Doshisha University) gave a presentation titled “Lesbian Screen: A History of Experimental Film by Barbara Hammer”. Kanno argued that Hammer’s films represent plurality of lesbian histories and also critically question the male-centred history of

experimental cinema and framework of essential cinema. Kanno suggested that throughout her life as a filmmaker Hammer projected bodies and histories of lesbians onto “blank screen”, that lacks lesbian representations. Hammer’s works, which were excluded from the “history” of essential cinema, were screened in alternative space such as feminist books stores, women’s coffee house, and classroom of women’s studies class. “Trilogy of invisible histories” was also explained. *Nitrate Kisses* (1992) focuses on lesbian and gay histories that were made invisible as its main theme and shows histories fragmentally by using collages and montages in order to eschew the voyeuristic gaze. *Tender Fictions* (1995) has autobiographical nature and foregrounds Hammer as an image-maker (subject), not the object to be looked at. *History Lessons* (2000), which was streamed in the event, intentionally reappropriates negative representations of lesbians and produces queer criticisms. Furthermore, Kanno introduced Maya Deren, whom Hammer was strongly influenced by, and Jane Brakhage (Wodening), who Hammer was friends with. Regarding the significance of Deren, Kanno pointed out that Hammer followed Deren by inheriting bodiliness in works, the idea of creative geography (which Deren created) and the role of filmmaker as performer. As for Jane Wodening, Kanno maintained that Hammer filmed her in *Jane Brakhage* (1974) from a different perspective to Stan Brakhage. In the end, Kanno suggested that histories that Hammer attempted to show are counter-histories against formalism and experimental cinema, and they are collective histories of lesbian and feminist histories.

In Q&A session, the importance of investigating feminist/queer films in different areas –not limited to north America or the UK—and of screening them was discussed. Further, concerning video works, due to deterioration of VHS as medium, it was pointed out that digitization of the video works is urgent task. Also, the significance of enhancing information accessibility and of acquiring budget to continue film screening events was shared and discussed.

The event indeed closely approached “the present” of feminist/queer

curation by discussing the difficulties in the practices of feminist/queer film curation in Japan today. As the title of the event “History Lessons” indicates, from each presenter’s presentation and Hammer’s film *History Lessons*, the event gave us a hint of what we should read from “history” and archives, which are never “neutral”, and how we could possibly connect them to the practice of feminist and queer activism.